

「閉ざされるのは、開かれるため」

使徒行伝 16章 6節～15節

説 教 本庄侑子牧師

わたしたちがイエス・キリストへの信仰に導かれ、遣わされる道は、行き止まりの道ではありません。自分の出来不出来で、開いたり、閉じたりするような道でもありません。自分の計画通り、がむしゃらに切り開いていく道でもありません。わたしたちが遣わされるのは、終わりの日まで、主が私たちの先頭に立って進んで行かれる道。それも、「助けてください!」という叫びを聞き、ご自身の福音によって救い出すために渡って行かすにはいられない、主の伝道の道です。

パウロたちは、不可解な日々を重ねていました。思いどおりに進めないのです。これまでも道を阻まれたことはありました。しかし、それらは迫害でした。今回、道を阻んだのは「聖霊」「イエスの御霊」でした。主の伝道のために、とすることを主ご自身に禁じられたのです。何度も計画変更し、たどり着いたのはトロアスという港町でした。伝道にふさわしい場所とは思えず、前には海が広がっています。とうとう行くべき道さえもなくなってしまいました。

パウロが幻を見たのは、ある夜のことでした。海向こうのマケドニヤ人が懇願するのです。「マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けてください。」(9節)パウロはハッとしました。あらゆる道を閉ざして、この海辺にまで連れてきてくださったのは主なのだ、と。失敗を重ねたように感じた歩みは、パウロが思いつきもしなかった、海を越えてヨーロッパへ福音をもたらすという、もっと大きな主のご計画へと導かれるためでした。それは、教会の歴史にとって画期的な一歩となりました。

9節から、使徒行伝の主語が「彼ら」から「私たち」に変わっています。この時から、使徒行伝の著者ルカが関わったからではないか、と言われています。途方に暮れていた海辺でルカとの出会いが与えられたのです。ルカはマケドニヤ人で、医者でした。海を越える時も、ルカが同伴してくれたら安心です。パウロが見た幻は、突然、天から降ってきたというよりは、ルカとの出会いを経て、共に主を見上げて祈るようになった日々の中で現れ出たのかもしれませんが。

私たちも、たくさんの人たちに福音を伝えるための計画はしても、すでに近くに、具体的に存在しているのに見えていない幻があるのかもしれませんが。福音を届けるには、海を越えなくてはならないような険しさがあって、見ようとしていない幻があるのかもしれませんが。福音

は、あらゆる危険を承知の上で、天から地に渡って来すにはいられなかったお方から始まりました。私たちが召されているのは、そんな神の捨て身の冒険です。

パウロたちが渡っていった先で、主はルデヤの心を開き、家族と共に洗礼へと導かれました。ルデヤは、紫布を売るためにアジア州から出張に来ていた女性でした。神を敬う人で、出張先で、わざわざ安息日に祈り場に集っていました。高級品を売り買いする日々の中、魂の底から突き上げてくるような人生の問いを抱えていたのかもしれませんが。聖書が証する神を信じて生きる人たちの噂を聞いて憧れのようなものを抱き、出張先で、わざわざ祈り場を見つけて祈っていたのかもしれませんが。神様は、このルデヤの叫びを聞き、福音を伝えるために、パウロたちを遣わされたのです。

ルデヤはパウロたちに言いました。「もし、私を主を信じる者とお思いでしたら、どうぞ、私の家に来て泊まってください。」エマオ途上の弟子たちを思い出します。失意の中、日が落ちていく道を歩いていた弟子たちの間に復活のイエス様が来られて、聖書を解き明かしてくださった。すると心が燃えて、どうか今夜、私たちの家に泊まってほしいと、強いてひきとめました。もっともっと、この言葉を聞いていたい、この言葉が私の全てとなるまでに。そうして思わず家にまで迎え入れた、あの弟子たちと同じことがルデヤにも起こったのです。

このルデヤからピリピ教会が立ち、主の福音は、その地域一帯に宣べ伝えられて行くようになりました。一人の罪びとに与えられた「私の家に来て泊まってください。」との切なる祈りが、その人自身と家、そして地域の人々にとっての救いの物語の始まりとなりました。

もし、道が閉ざされているように見えるなら、思いがけないところで、主の道が開いているのかもしれませんが。それは、私たちの心が追いやっているマケドニヤ人に向かう道であり、自分自身の罪や家の中に向かう道かもしれません。しかし、そこに道は開かれて、主ご自身が渡ってきて泊まってくださいます。そして、そんな私たちから始まり、大きく広がって行く、教会の歴史にとって画期的な一歩、主の救いの物語があるのです。

(記 本庄侑子)